知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

MARCH 2019 3

伝説の里、三和（みわ）めぐり ～矢田の巻

伝説の里、三和（みわ）めぐり

矢田の巻

親から子、子から孫へと伝えられてきたふるさとの昔話。
しかし現代社会では、
地元の昔話を語る人も少なくなったのではないか。
今号と次号では二回連続で、
今からおよそ八十六年前に編まれた一冊の伝説集を片手に
常滑市三和地区を歩いてみる。

三和の人々はかく語りき

常滑市の最北部に位置する三和地区は、小倉、宮山、石瀬、前山、久米、矢田の六集落から成つている。三和は、明治三十九年（一九〇六）に金山村（小倉・宮山・石瀬・前山）、久米村、矢田村の三か村が合併したときに「知多郡三和村」として誕生した地名で、三つの村がともに仲よくし発展することを願つて命名された。昭和二十九年（一九五四）の常滑市発足で村名は消えたが、以後も三和小学校にその名を残している。

今回取り上げる「郷土讀本　傳説篇」は、昭和八年（一九三三）の発行で、その三和小学校の前身である三和第一尋常高等小学校が児童向けに制作したものである。著者の名義は「郷土研究会」で、これはおそらく三和在住の郷土史愛好家のグループ。前書きによると「特に御骨折下さつたのは、竹内友三郎・青木正臣・水野八郎・都築浩吉・榊原清則・畑中周次郎、蜷川あや子及び竹内親義の諸先生」で、また「昨年の夏休みに、諸先生方の御指図に従つて、皆さん方が集めて下さつた『郷土の伝説』も、良い参考になりました」とある。教員や児童たちが、土地の古老を訪ねて昔ばなしの聞き取りを行い、それらを元にしてこの本が編まれたのであろう。

前書きにはこんな一文も記されている。

くり返へしくり返へし、何べんも讀み返へして、よく郷土の傳説を味わつて下さい。かうして出來る美しい心根は、よい村の子供、よい日本の子供として誰にでも必要なものであります。

全五〇ページ、四十七本にも及ぶ三和地区のさまざまな伝説の中には、本誌で触れたことのある話も二編収められている。ひとつは、大野城主佐治与九郎の妻・江が焼け落ちる城から逃げるときに持ち出した阿弥陀仏を供養したことが起源という、虫供養の話（2015年1月号「虫供養が結ぶ、大野谷」）。もうひとつは、人魚の肉を食べさせられた娘が若々しい姿のまま八百年も生きたという、前山の八尾比丘尼の話（2017年6月号「知多半島姫ものがたり三話」）。これ以外の話は、土地の人すらも知らないのではないだろうか。

その中から、まずは矢田の伝説をいくつか味わってみるとしよう。

北池を築いた人の話

二四　きたの池 ……

昔、矢田に村上藤太夫・皆川喜太夫・芳山助太夫はじめ七人の太夫と戸田八郎左衛門といふ殿様がありました。この殿様の召使に喜太郎といふ人があつて、御馬屋勤めをしてゐました。大へん勤めがよかつたから、その賞として殿様から、「何でものぞみのことがあつたら申出よ。」とのおほせがありました。喜太郎はこのありがたいおほせをうけて、いろ〳〵考へましたが、矢田には旱田が多いから、これをよくしやうと思つて、溜池をつくることを願ひ出ました。さつそくおゆるしがあつて、喜太郎は大池をつくり、その名を喜太郎池とつけました。今の北池がこの喜太郎池だといふことであります。

矢田は常滑市の北部、大野の海岸から四キロほど奥まったところにある集落だ。真ん中を流れる矢田川の土手は常滑の桜の名所の一つとして知られているので、地元以外でも矢田川を御存知の方は多いだろう。

その矢田川をさらに二キロ遡って半島脊梁部の丘を登ると、阿久比町との市町境ぎりぎりのところに大きな溜池がある。それが、矢田川の源流でもある北池だ（表紙の写真）。

東西に細長い形をしており、端から端までおよそ六五〇メートルもある。常滑市内に数ある溜池の中でも最上位クラスの大きさである。地図で見ると、北池は三和地区の最北端（すなわち常滑市の最北端）にある。ゆえに北池という名前なのかと思いきや、実は築造者である喜太郎さんが由来だったのだ。

池の周囲に人家は一軒も見当たらず、整然と区切られた水田と、藪しかない。季節が良ければ爽快な田園風景が広がる場所なのだが、「北」のイメージもあいまってか、冬はどことなく荒涼とした雰囲気が漂う。それが逆になんとも言えない味わい深さを醸し出している…と感じるのは、我々取材班だけだろうか。

八幡神社に救われた話

六　旅と八幡様 ……

矢田の人は旅に出る時にはきつと氏神様に参拝するならはしがあります。昔、信州善光寺に大地震があつて、死んだ旅人が約一萬人もあつたが、この時矢田の人も善光寺まゐりをしてゐました。其時宿屋はたちまち倒れて、屋根の下積になつたが、丸八の提灯が眼の前に出て、逃げ道を案内してくれました。命からがら逃げ出して助かつた人は、不思議なことには、旅に出る時、氏神様に参拝して来た人ばかりでした。丸八は八幡様であつたと、いづれも氏神様の御恩を有難く思ひました。

本書には、神仏の霊験にまつわる話も多く収められている。今でも三和地区の人は信仰を大切にしている印象があるが、明治・大正・昭和戦前の人々は、現代に生きる我々の想像を遥かに上回るほどの篤い信仰心を持っていた。

ここに出てくる「丸八」の「八幡様」とは、矢田の集落の東外れに鎮座する八幡神社のこと。今度の四月十三日（土）・十四日（日）には祭礼が執り行われ、二台の山車が曳き回される。

小さな山全体が神域になっており、緑に包まれた心地よい神社だ。中腹に建つ拝殿へと通じる石段の登り口に由緒書があり、それによると、室町時代半ばの明応四年（一四九五）、戸田又七郎正秀・戸田又八郎正朝が大和国の男山八幡宮を勧請したという。戸田又八郎正朝は「きたのいけ」の話に出てきた殿様の戸田八郎左衛門と同一人物だろう。

話に出てくる信州善光寺の大地震とは、江戸時代後期の弘化四年（一八四七）に長野県北部一帯を襲った「善光寺地震」のこと。ちょうど善光寺の御開帳と重なり参拝者が多かったため、長野の町だけでも死者二千数百人という甚大な被害が出た。しかし、矢田の人た

「おぢいさんやおばあさんは私達をよくお膝の上にのせて、
面白い郷土の傳説を聞かして下さいました。」

矢田の全景

ちは八幡様のおかげで助かった、というのだ。

本書が発行されたのは地震のおよそ百年後。経験者の孫くらいならばまだ何人かは存命していたはずで、リアルな話として語り継がれていたと思われる。今も矢田の古老には、旅行前に八幡神社に参拝する人がいるとかいないとか…。

願いを叶える地蔵の話

一九　だき地蔵……

矢田の信谷院の今から三代前の住職の頃、弟子に二人の尼さんがあつて、雨のふる日も、風の吹く日も毎日々々たくはつしてまはつて、少しづゝのお金をためました。そのお金で石の地蔵さんをつくつて、この寺の墓地にたてました。

ある日、あんまさんが歯が痛くて困つていました。どうしてもなほらないので、一つお地蔵さんにおねがひして見ようと思つて、おまゐりに来ました。そして豆に針をさして、そのそばにいけ、お地蔵さんに、「豆が芽を出さなかつたら、歯のいたみをなほして下さい。」と願をかけました。すると不思議なことに、間もなく歯の痛みが治つてしまひました。そのことがだんくひろまつて、ごりやくのあるお地蔵さんだといふひやうばんになりました。

それからこのお地蔵さんに願をかける人は、ねがひ事を心に念じながら、そつとお地蔵さんをだいて見ると、その願ひが叶ふか叶はないかわかると云つて、朝晩人に見られないやうに、抱きに来る人が多いさうです。願の叶わないときは、とても重くて動かないし、かなふときには、軽々と上ると言はれてゐます。お地蔵さんがまつられてから凡そ百年、今に至るまで信仰する人の絶えないのも、ごりやくのあるためであります。

もう一編、信仰に関する伝説。

信谷院は矢田で唯一の寺院である。創建は戦国時代の天正元年（一五七三）。本書に収められている「二九　矢田のおこり」の項によれば、海岸沿いの大草（現知多市）からこのあたりの山へ薪を取りに来ていた人がそのうち住み着くようになって矢田の村ができ、信谷院もその頃にできた、とある。

寺があるのは集落北東の高台。家と家の間に伸びる路地のような参道に入り、突き当りの石段を登ると信谷院である。標高こそ低いが見晴らしは悪くない。西側には知多市南粕谷の団地が広がり、民家が丘を埋め尽くしている。今も里山集落の風情が色濃い矢田との対比はなかなか興味深い。

だき地蔵は、本堂の西に祀られていた（P.02の写真）。コンクリートブロックの小堂に守られたその地蔵は、高さ五十センチに満たない細身の石像だ。本書では、尼さんがこつこつと貯めたお金で作ったということだが、一心に仏の道を行くその慎ましい生き方が像に現れているように見える。蓮華座の上にちょこんと安置されており、ひょいと抱きかかえられそう。しかし、尼さんの存在を知った以上、邪心を持って興味本位で触るのは気が引ける。なので、そっと手を合わせるにとどめておいた。

住職の山西俊亨さんに聞くと、信谷院は先述した戸田八郎左衛門の屋敷跡に建てられ、本堂の裏は馬場だったという。戸田家で馬といえば「二四　きたの池」の話では、北池を築いた喜太郎は戸田家の御馬屋勤めをしていたと記されていた。また、近年まで八郎左衛門を供養する「戸田講」が、土地の人々により営まれていたそうだ。

丘の上の薬師堂の話

一八　七本木の薬師……

昔、矢田の人たちが前の矢田川の川ざらえをした時、セチガヒといふ所でカチンとくはにあたつたものがあります。何かと思つてよく見ると、それは薬師様の尊体でした。ある人に見てもらつたら、弘法様の御作だといふことでした。

村人たちは大そうよろこんで、そこにお堂をたてゝまつゝてゐました。（それでセチガヒ薬師とも申します。）けれどもある時、夢のおつげがあつたので、今のところへおまつりしたのださうです。そのころ、こゝには松が七本はえて居ましたので、七本木の薬師といふやうになりました。

七本木の薬師とは、今の矢田薬師堂に祀られている薬師像のこと。矢田薬師堂は、ネット地図だと縮尺を大きくしないと表示されないような小さな無住の御堂だ。昔から矢田区の所有であり、区の代表者と信谷院が世話人として管理をしているということなので、だき地蔵を拝んだ後、住職の山西さんに案内してもらった（P.08の写真）。

矢田の集落は、常滑のやきもの散歩道で見られるような路地が入り組んでいる。その路地のひとつで、地元では「お殿小路」と呼ばれる道に入り込み、土留めの土管を眺めつつ坂を上ると、薬師堂に出た。伝説に出てきた七本の松は

「お父さんやお母さんが、いつも寝物語に
聞かして下さつたのも、この郷土の傳説でありました。」

信谷院のだき地蔵

信谷院に祀られている薬師堂の前立仏

信谷院本堂

矢田八幡神社の参道

矢田八幡神社の拝殿

薬師堂の厨子

薬師堂の絵馬

旧三和東保育園から望む

北池の全景

「郷土の傳説を聞くことは、この上もない楽しみで、
なほ今でもなつかしい思出の種となつてゐます。」

見当たらないが、境内には桜が植えられており、もう少しすると花見が楽しめそうだ。山西さんによると、開創したのは大徳という修行者。寺の過去帳には、この人は江戸時代中期の宝永五年（一七〇八）没と記されており、薬師堂はそれより前に建てられたという。小さいながらも歴史を感じさせる年季の入った建物だ。

中に入ると正面に厨子（ずし）があり、薬師はこの中に安置されているが、基本的に六十年に一度しか開帳しない秘仏とのこと。以前は厨子の前に本尊の身代わりである前立仏（まえだちぶつ）が置かれていたが、今は信谷院に移され、法会も信谷院で行っているという。山西さんに促されて上を見ると、格天井の一枚一枚に絵が描かれており、驚かされる。その数はおよそ百枚とか。また、堂内には江戸時代に奉納された数枚の大きな絵馬も掲げられている。小さな御堂ながら一般的な寺と遜色ない風格があり、矢田の人々が心のよりどころとして大切にしてきたことが窺える。

＊　＊　＊

このように伝説といっても、その話は意外に事実を反映しているであろうことが、矢田を少し歩いただけでも感じられた。次回は、続けて他の集落も歩いてみたい。

参考文献◎郷土讀本　傳説篇（三和第一尋常高等小学校）　資料提供◎江端祥弌さん　取材協力◎薬王山信谷院
各ページの大見出しは「郷土讀本　傳説篇」巻頭の「はじめの言葉」からの抜粋です。